

あるという点で、ネメシウヘジ師を髣髴とさせるような学者である。論文集という体裁を採っていることもあり、われわれがオリゲネス研究の新たな知見を本書から汲み取ることを期待するのは難しいかも知れない。しかしながら前世紀後半以降におけるオリゲネス研究の状況は、20世紀における「オリゲネスの完全復権」がしばしば話題になるように、かつて異端の烙印を押され焚書の憂き目に遭った人物とは思えないほどの隆盛を誇っている。本書の第1部において、オリゲネス研究史をたくみに鳥瞰してゆく著者の手腕はまことに見事であり、研究史の総括によってであれ、われわれの学びうる点が少なくないということを実感させてくれる。またオリゲネス自身というよりもオリゲネスに至るまでの「良心」概念の推移を克明に辿った第3部は、上述したように、このテーマが従来、教義学・基礎神学の絶対的権威とされてきたトマス・アクィナス『神学大全』の記述を背景に起こされたものであることを理解させ、かつ著者がハンガリーの教義学分野での責任者とも言う立場にあるだけに、尽くせぬ興味を喚起する。様々な点でわれわれに学ばせてくれることの多い本書を、好著として推薦したい。

---

Andrew Radde-Gallwitz

*Basil of Caesarea, Gregory of Nyssa,  
and the Transformation of Divine Simplicity*  
Oxford: Oxford University Press, 2009, pp. xxii + 261

---

土 橋 茂 樹

本書は、シカゴ・ロヨラ大学神学部の assistant professor である著者が、2007年にエモリー大学から博士学位を取得した際の学位論文「《求めよ、さらば与えられん》：神の単純性とカイサレイアのバシレイオス及びニュッサのグレゴリオスにおける〈神を知ること〉」にかなりの加筆訂正を施したうえで、Oxford Early Christian Studies シリーズの1冊として公刊されたものである。著者はその後、2011年に本書が高く評価されて、優れた学位論文に与えられるテンプレート賞を受賞、同年には Mark DelCogliano との共訳でバシレイオス『エウノミ

オス論駁』の英訳本を、次いで2012年にはバシレイオスに関する非常によくできた啓蒙書を立て続けに刊行し、今、まさに乗りに乗っている若手研究者の一人である<sup>1)</sup>。ややもすると弟グレゴリオスの名声の陰に隠れがちであったバシレイオス研究にあつて、V. DrecollやP. Rouseauを始めとして、近年は本誌で紹介したこともあるS. Hildebrand<sup>2)</sup>やM. DelCogliano<sup>3)</sup>など、神学者・哲学者としてのバシレイオスの新たな可能性の開拓に新世代の躍進が著しく、中でも、<sup>メンター</sup>師Lewis Ayresの薫陶を受け、その若さに似合わぬ師匠譲りの周到な目配りと深い洞察によって教父研究者必読の本書を仕上げた著者の力量は、カッパドキア教父研究が今まさに大きく躍動しつつあることの象徴として高く評価されるべきであろう。

本書の目的は、4世紀後半に俄かに立ち現れた神学的言語とそれに関連する「神学的認識論」(theological epistemology)の問題、すなわち、人間が神について何を知り得、知り得ないのかという根本的な問題の本性と重要性、およびその問題に対するバシレイオスとグレゴリオスによる応答の特徴を明らかにすることである。しかし、タイトルにも掲げられたバシレイオス兄弟のために直接割かれる紙数は本書の約半分(第5~7章)ほどであり、残りの大半(第1~4章)はいわばその前史とでも言い得る部分に充てられている。そこが本書の特徴であり魅力でもある。思想史の面白さを満喫させてくれる前半部で丁寧に跡付けられるのは、一方で本書を貫く縦糸として、神の単純性<sup>ハプロテウス</sup>の教説およびそれから生じる神学的認識論上の問題(もし、神が単純<sup>ハブルース</sup>であるならば、聖書の叙述等に見られる諸々の神の属性によって果たして神は知られ得るのか、という問題)であり、他方で横糸として、プラトン対話篇に由来し、教父たちに継承された認識論上の定義優先の原則(そもそも何かを知るということは、それを説明し、定義できること、すなわち、その本質を知ることである、という原則)である。こうした縦糸

1) St. Basil of Caesarea, *Against Eunomius*, trans. by Mark DelCogliano & Andrew Radde-Gallwitz, Washington, D. C.: The Catholic University of America Press, 2011; Andrew Radde-Gallwitz, *Basil of Caesarea — A Guide to His Life and Doctrine*, Eugene OR.: Cascade Books, 2012.

2) 拙評: Stephen M. Hildebrand, *The Trinitarian Theology of Basil of Caesarea*, 『中世思想研究』第52号, 2010, pp.177-180.

3) Mark DelCogliano, *Basil of Caesarea's Anti-Eunomian Theory of Names — Christian Theology and Late-Antique Philosophy in the Fourth Century Trinitarian Controversy*, Leiden/Boston: Brill, 2010.

と横糸の編み込みの一つの典型が、本書で「同一性テーゼ」(identity thesis) と呼ばれるもの、すなわち「ひとが神に帰属させるあらゆる語は、神の本質・実体を名指す。形而上学的には、神の本質と神の特性は、実際に同一である」という主張で、バシレイオス兄弟の論敵であるエウノミオスの立場である。対して、その対極には、このように単純な神の知には、何ら肯定的な内容はない、という否定神学的な主張が控えている。その上で、本書後半で仔細に論じられるように、バシレイオスとグレゴリオスが同一性テーゼにも否定神学にも与することなく独自の主張を為し得たのは、彼らによって神の単純性という概念そのものに変容が加えられたからだ、という本書の結論部へと導かれることになる。

本書の第1章では、2世紀ウァレンティノス派のプトレマイオスにおいて、世界創造や立法といった活動と至高神の特徴である絶対的な完成という属性との間に見出される矛盾に焦点が合わせられる。至高神は単純であり、内的な不一致はあり得ない以上、創造や立法といった活動は、至高神よりも劣ったレベルの神的実在に帰すべきだ、というのがプトレマイオスの主張である。ここでの議論は、バシレイオス兄弟が、父と子と聖霊の活動の間に矛盾はないと主張する際の思想背景として極めて重要である。第2章では、クレメンスの否定神学へと目が転じられ、彼の主張を基礎付けているのが認識論上の定義優先の原則であったことが論じられる。続けて同章では、2世紀から4世紀への移行期において非常に重要な、つまり〈神の本質に関して神が真に何であるか〉という問いと〈それについて我々は何を知り得るか〉という問いとの間に緊張をもたらした人物としてオリゲネスが取り上げられる。第3章では、アエティオスとエウノミオスの神学的認識論の背景として、「不生性」という語の歴史と、神に述語づけられる単純さという語が何を意味するかという点に関するアタナシオスの議論が紹介され、続く第4章では、いわば前半のクライマックスとして、エウノミオスたちが認識論上の定義優先の原則の修正版すなわち同一性テーゼに基づいて導出した神の単純性にかかわる解釈が考察される。単純な神の本質は、「始まりがない=生まれざるもの」(不生性)であると同時に「<sup>アグネートス</sup>生まれたもの」であると言われる時、根本的な矛盾をはらむ。こうした矛盾する特性は、単純な実体を特徴づけることができない。そこで彼らはプトレマイオスの場合と同様に、矛盾する二つの語の一方(「<sup>アグネートス</sup>生まれたもの」)を低次元の神性へと格下げし、他方(「不生性」)を神の本質を名指すものとして特権化したのである。バシレイオス兄弟によれば、三一の神

にこうした矛盾を帰した者こそエウノミオスであり、子を父に従属させることによって、彼はそれと意識することなく神の善性に対立する悪を混合してしまったのである。対して、彼らにとっては、神が単純であると言うことは、神的な善性がそれと矛盾する悪と混ざり合っていないと言うことに他ならない。バシレイオス兄弟は、神の無矛盾性の問題との繋がりで、単純性にかかわるこのように長い神学的伝統に関与していたのだと言えよう。

同一性テーゼと否定神学、両者いずれにとっても、根本的な仕方では本質の知に依存している。この点でバシレイオス兄弟は先人たちと袂を分かたず。彼らにとって、何かを確実に知ることは、対象の本質を知ることに依拠してはいない。このように定義優先の原則を含まない神学的な認識論、さらには、同一性テーゼと否定神学のいずれをも回避できるような神の単純性理論を彼らがどうやって構築していったか、その詳細が第5~7章で明らかにされる。その経緯を詳述する紙幅の余裕はないが、彼らの主張で重要な位置を占める概念の一つとして、「(本質的)固有性 (propria)」を挙げておきたい。ギリシア語形容詞「固有な」<sup>イディオス</sup>から派生した「固有性」<sup>イディオテス</sup>(そのラテン語訳が propria) は、哲学用語として見る限り、偶有性を意味する用法(たとえば、「スミスは医術の心得がある」と言われる時の「医術の心得」)の他に、種における特性を意味する用法(たとえば、「ウマはいなくなることができる」と言われる時の「いなくな能力」)がある。バシレイオス兄弟が神の属性を語るときに念頭に置いていたのが後者であることは疑い得ない。いなくなることができないウマを考えることができないように、我々は善なしに神を考えることができない。このような本質的な固有性、バシレイオスなら「本質のロゴス」と呼ぶところの、光、命、力、善といった語で名指されるものは、父と子に共有される属性であるが、神の本質(の部分)ではない、言い換えれば神の定義を構成する要素ではない。しかし、何かがウマであれば必然的にいなくな能力があることが真であり、その逆もまた真となるようなものが、本質的な固有性である。本書の結論部では、このように本質を構成するものではないが、偶有的な属性からは厳密に区別される本質的固有性、さらにはそれを把握するために概念化されたもの(エピノイア)という道具立てを意識的に用いることによって、バシレイオスとグレゴリオスが神の知を定義優先の原則から分離し得たことこそ、彼らが神の単純性の教義を変容させたことの核心であったと纏められる。

最後に、このような神の単純性をめぐるバシレイオス兄弟の画期的な主張が、

なぜ永らく研究者の間で積極的に取沙汰されることがなかったのか、その点に若干触れておきたい。一つには、やはり初期キリスト教のギリシア哲学使用の正当性に関するハルナック的な疑念が、依然として、(ギリシア哲学に由来するとみなされた上での) 神の単純性に対する軽視の動向を作り出していたものと思われる。幸いなことに、こうした動向の前提そのものが、むしろ不正確だというコンセンサスが生じつつある。そうしたコンセンサスの基礎固めに尽力した M. Barnes や L. Ayres らが登場する以前にも、神の単純性に興味を示した研究者がわずかながらいるにはいたが、彼らはその教説の整合性を否定する傾向にあった。そのもっとも顕著な例が C. Stead である。彼の影響の大きさゆえであろうか、著者の Stead に対する批判は時にやや苛烈に過ぎるきらいがあるが、その自信に満ちた筆致は個人的には痛快であった。いずれにせよ、細部にわたるまでよく練られた本書によって、マルキオンやユスティノスからアレリオス (／エウノミオス) 論争の終焉に至るまでの教父哲学史の見方が見事なほど鮮やかに刷新される喜びを是非とも味わっていただきたい、そう思わずにはいられない力作である。

---

Brian Stock

*Augustine's Inner Dialogue:*

*The Philosophical Soliloquy in Late Antiquity*

Cambridge: Cambridge University Press, 2010. pp. xiii + 240

---

上 村 直 樹

本書は、アウグスティヌスの初期著作を中心に、『告白』、『神の国』、『三位一体論』まで射程を広げ、自己との内的な対話 (soliloquy) がいかに展開したかを論じ、この対話を「霊的な修練」(spiritual exercise) として捉えようとする研究である。古代において自己の変容、治癒として実践された「霊的な修練」についてのピエール・アド氏の諸研究を踏まえ、哲学的、神学的な観点からにとどまらず、文学上の装置として対話の果たした役割が考察される。著者ブライアン・ストック氏は、トロント大学名誉教授 (歴史学・比較文学)。ケンブリッジ大学